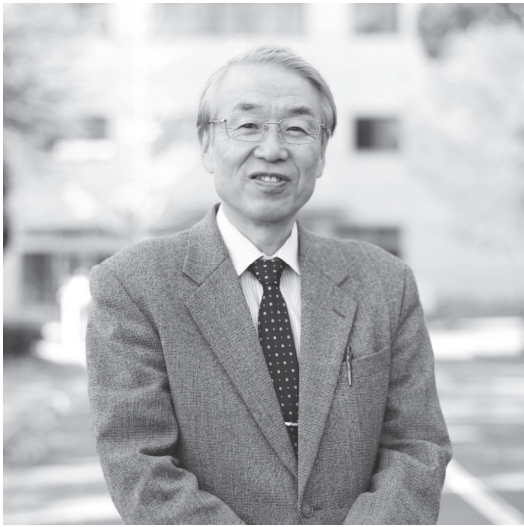


序 文



昨年 4 月に発生した熊本地震から 1 年が経過し、ようやくインフラ復旧が本格化したばかりという平成 29 年 7 月、再び九州地方を深刻な災害が襲いました。2017 年九州北部豪雨です。2017 年 7 月 5 日午後から 6 日未明にかけて、対馬海峡から九州北部、さらに四国にかけて停滞した梅雨前線に九州南部から湿った大気が連続的に流れ込んだ結果、福岡県朝倉市などで線状降水帯が形成され、多いところでは半日で 800mm を超える記録的な大雨となりました。このため、筑後川

に北側から流入する北川、赤谷川、寒水川などの中小河川上流部で広範囲に斜面崩壊が発生し、大量の流木が発生した結果、中小河川の洪水氾濫に加え、大量の土砂と流木が周辺家屋を襲うことになりました。この豪雨による洪水や土砂災害で、福岡県と大分県で 40 名以上の死者・行方不明者を出す人的被害が発生しています。本センターでも、土砂災害、河川氾濫、学校や社会福祉施設等の事業所被害等について現地調査を実施し、平成 29 年 10 月 23 日に災害調査報告会を開催いたしました。

政府が 3 月に発表した資料によりますと、南海トラフ地震の発生確率は 10 年以内で 30% 程度、20 年以内で 50% 程度となっております。昨年度の熊本地震、鳥取県中部地震等の活断層型地震、各地で発生する豪雨災害、まさに災害の世紀の様相を呈しています。こうした自然災害による被害をいかに軽減するか、当センターが果たすべき役割は年々増大していると感じております。

本センターの特徴は防災関連の研究に加えて、自然生態系を守るための研究と社会活動を大切にしているところにあります。今年度も昨年度に引き続き「生物多様性とくしま会議」や「みなみから届ける環づくり会議」の運営・活動の支援、「スマホ生きもの調査」などを住民や学外の研究者とともに進めています。

このたび、第 14 号の徳島大学環境防災研究センター年報を発刊し、私どもの研究と社会貢献に係る活動の一端を紹介させていただきます。この 14 年間、国、地方自治体、関連企業、ならびに本学から多大なご支援を得て、順調に事業・活動実績を積み重ねてまいることができました。

徳島大学では大学の活性化とレベルアップを図るため、組織再編が行われており、当センターでも、平成 29 年 4 月 1 日から体制を見直し、5 部門、1 室から 4 部門（防

災研究部門，環境研究部門，災害医療部門，危機管理研究部門）に再編成いたしました。また，理工学研究部所属の中野 晋，上月康則，蔣 景彩，山中亮一の4名がセンター専任教員に所属替えとなり，湯浅恭史と併せて，5名の専任教員で運営を行っております。

この場をお借りして，関係各位の皆様にこれまでいただきましたご支援とご協力に感謝申し上げますとともに，今後とも引き続き各方面からのご支援，ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月

徳島大学環境防災研究センター
センター長 中野 晋